

フレーベルにおける乳幼児期の食体験の位置づけ

石村, 華代
九州ルーテル学院大学

<https://doi.org/10.15017/6787157>

出版情報：生活体験学習研究. 20, pp.37-44, 2020-07-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



フレーベルにおける乳幼児期の食体験の位置づけ

石 村 華 代*

How Did Fröbel Value of Food Experience During Infancy?

Ishimura Kayo*

要旨 本稿の目的は、フレーベルが乳幼児期の食体験にどのような意義を見いだしていたのかを解明することである。彼は、乳幼児期の食事を「諸印象の享受」として捉えている。食事は、その時期の発達課題の中心として位置づけられているわけではないが、その時期における発達を支える基盤としてしっかりと機能している。また、食事の体験は、私たちの生涯にわたる倫理的な在り方を規定するものとみなされている。子どもには、まず、質素でほどよい食生活を習慣づけ、節度ある振る舞いを身につけさせなければならない。また同時に、様々な味わいの体験を通じて、子どもが味覚などの感覚を鋭敏に働かせ、品位ある趣味を形成し、精神面での発達にも影響を与えられるよう働きかけなければならない。本論で明らかにした食体験に関するフレーベルの記述は、なぜ刺激の強い食習慣を避けるべきなのかという、現代の食生活上の課題から生じる問いに対しても、説明のための手がかりを与えるであろう。

キーワード フレーベル、食体験、乳幼児期、倫理的な在り方、味覚

はじめに

本稿の目的は、世界で初めて体系的な幼稚園 (Kindergarten) を創設した人物として知られるフレーベル (Fröbel, F.W.A. 1782~1852) が、乳幼児期の食体験¹⁾ にどのような意義を見いだしていたのかを解明することである。本稿は、これまでの西洋の保育・教育思想の中でどのように食体験が位置づけられてきたのかを明らかにすることを目的とした研究の端緒となる予定のものである。そのため、本稿を含めた研究全体の問題の所在を以下に示す。

近年の西洋教育史研究によると、原義での教育 (education) は「引き出す」ことを意味するのではない。英語 education の語源であるラテン語 educatio は「ギリシア語 τροφή (栄養・養育) に対応した<食>を核とした<生>を養う営みとして理解

しうる」(白水 2016: 140)。つまり、教育の古層には<食>を中心とした<養生>の営みがある、ということが語源学では明らかになっている。しかしながら、現代においては、例えば<食>を取り扱う家庭科が学校でますます周縁に位置づけられるようになっていくことなどからも分かるように (ex. 小松 2012)、教育の目的は「能力」の育成へと狭隘化し (白水 2011)、<食>を中心とした<養生>と教育との結びつきは希薄化している。

このような忘れられた連関に光を当てようとしているのが、ザイヒター (Seichter, S.) の研究である。彼女は「教育と栄養の関連についての、教育学の主要作品の中に隠された知を思い出させる」(Seichter 2015: 113) ために、博士論文『教育と栄養 ― 子ども期へのもう一つのまなざし』の一節において12名の作品を分析している。その中ではフレーベルも取

*九州ルーテル学院大学

連絡先: 〒860-8520 熊本県中央区黒髪3丁目12-16 E-mail: ishimura@klc.ac.jp

TEL: 096-343-1600

り上げられているが、ザイヒターは、彼の主著『人間の教育』だけを参照しており、また、栄養と教育が結びついた部分を詳しく論じているわけでもない(Seichter 2012: 75-77)。フレーベルにおける「教育と栄養の連関」というザイヒターの視点を活かしつつそれを深めていくために、本稿では『人間の教育』以外の文献も参照し、食体験に関する記述がどのような文脈でなされているのかを丁寧に吟味したい。

フレーベルが食体験に直接的に言及しているのは、乳児期と幼児期という二つの発達段階に限られている。本稿ではこれらの発達段階を取り扱うが、その際、食体験だけを抽出するのではなく、乳児期および幼児期における子どもの発達の姿やその課題の全体を捉えながら、食体験がフレーベルの思想全体のどの部分にどのように位置づけられるのかに焦点を当てる。論述の順序としては、まず、乳児期に関するフレーベルの記述を分析し(1-1)、乳児の食体験としての「哺乳」の位置づけを明らかにする(1-2)。次に、幼児期に関する記述を概観した上で(2-1)、『人間の教育』及び『母の歌と愛撫の歌』において幼児期の食体験がどのように描かれているのかを考察する(2-2-1及び2-2-2)。

1 乳児期

1-1 乳児期の保育

まず、フレーベルの『人間の教育』及び論文「幼児、あるいは子どもの初めての活動の重要性」をもとに、彼が乳児期の保育(Pflege)²⁾をどのように捉えていたのかを明らかにする。ここでは、「良質な印象の享受」、「身体の適切な使用」、「共同感情と自己意識の芽生え」の三つの要素について説明する³⁾。

まず、「良質な印象の享受」について見てみよう。フレーベルによると、生まれたばかりの乳児(Säugling)は、「外部の多様性を受け取り、それを自己のなかに取り込む」(ME 22=39)という形で存在している。乳児期は、外部からの様々な印象を「のみこむ(saugen)」段階にある。そのため、大人は、子どもの身の周りにいる人々のまなざしや表情といった人的環境、空気や光、室内の清潔さといった物理的環境に注意を払い、子どもに良質な印象を与える必要がある。このうち、とりわけ両親のまなざしは乳児の発達を促す「太陽」(IM 389=344)の

ような役割を果たす。その他の環境は、乳児が「そのなかでまたそのもとで発達していく風土」(IM 389=344)のようなものであり、乳児期の成長には「太陽」と「風土」が欠かせないとされる。

ここで、フレーベルは「のみこむ(saugen)」という動詞から「眼(Augen)」という名詞へとイメージを広げ⁴⁾、以下のように述べる。「かれの全存在は、この段階では、外のものを自分のものにしようとする眼にほかならない。だからこそ、人間の発達のこの最初の段階が、すでに人間にとって、人間の現在と未来にとって、ことばに尽くせないほどきわめて重要なのである」(ME 22=39)。フレーベルは、乳児を、外のものへと開かれ、そこから直接の影響を受け、そこへとなすすべなく委ねられている存在として描いている。乳児は泣いたり微笑したりすることもあるが、そのような表出は「『のみこむ』という活動に、直接にかつ不可分に伴っている」(ME 22=39)付随的な作用として捉えられる。乳児がこの時期に受け取った印象は生涯の発達にとって決定的であるため、この時点で悪質な印象を与えられた場合には、それを「生涯を通じてほとんど克服しない」(ME 22=39)ともされる。

次に、「身体の適切な使用」について述べる。子どもは生まれてすぐに外界とのやりとりを始める。したがって、子どもがその「力を自由にかつ全面的に用いること」(ME 20=34)ができるように周囲の環境を整えることが、大人には求められる。生まれたばかりの子どもは、その身体的能力をまだわずかししか開花させていないが、四肢を動かし、身体のあらゆる部分を作動させながら、外部へとその力を自ら示そうとしている。この時期に重要なのは、身体の重心を定め、身体各部のバランスを取りながら、立ったり歩いたりすること、対象を握ったり持ったりすること、対象を見つけたり見つめたりすること、などである。

子どもは、その最も初期の段階から身体的存在として外界の対象に出会い、それと関わるが、時にはそれによって行く手を阻まれたり、思うように自分の力を発揮できなかつたりすることがある。しかし、そのような状況を乗り越えようと試みる中で、子どもは、自分のやりたいことやなすべきことの中に心を見定めながら、自らの力を最大限に引き出す術

を徐々に身につけていく。乳児期のこのような様々な身体的経験の蓄積は、子どもがその後の人生を歩んでいく際の基盤として機能し、「道徳的、宗教的に立つこと」(ME 33=64)へとつながっていく、とフレーベルは捉えていた。

最後に、彼は乳児期には「共同感情(Gemeingefühl)⁵⁾と自己意識⁶⁾の芽生え」があるとしている。この時期に特に重要なのは、母親との関係の形成である。「最初の微笑み」(ME 22=40)による母親とのやりとりを通して、乳児には平安や快感といった感情が起こる。そして、母親との穏やかな情緒的交流による共同感情を土台として、乳児には「子どもの、つまり人間の最も早い時期における自己意識の芽生え」(ME 20=36)が生ずる。その後、母親との感情の共有を起点として、父親やきょうだい、他の人々、人類や神との共同性の感覚が身につけられるのである。「最初の微笑み」によって生まれる共同感情は、「あらゆる真の宗教心の、すなわち永遠なもの、神との完全な結合を求めるすべての真の努力の最初の萌芽であり発端」(ME 23=40)である。そしてそれは、宗教的な敬虔さの基礎を形づくるものとみなされている。乳児の「最初の微笑み」とそこから生じる共同感情は、人間を他の被造物から分かち、「人間の品位や本質をかすかに示すもの」(IM 385-386=338)として、きわめて重要な意味を与えられている。

1-2 乳児期の発達における哺乳の位置づけ

次に、乳児期の食体験である「哺乳」について見てみよう。フレーベルが「哺乳」に直接的に言及しているのは一箇所だけである。この部分で、彼は、母親が子どもに自分で授乳して育てた場合と、他人に委ねて育てた場合では、子どもが成長してしまったからの「生の表現」(ME 22=40)に歴然とした差が生じると述べている。

子どもにとって母乳育児は、「良質の印象の享受」という点で意義がある。乳児が、母親のまなざしを受け取り、その乳房へと触れ、口唇を通じて味わいながら乳を摂取することで、その子どもには良質の印象が与えられるのである。フレーベルは、母親の授乳の仕方がその子どもの後半生の運命をも左右する重要な要素となるとみている。

1-1で取り上げた「身体の適切な使用」の部分では、フレーベルはおそらく哺乳を意識していないと思われる。というのも、ここでは、足、手、目といった身体の各部位が、それぞれ「立つ・歩く」、「握る・持つ」、「見つける・見つめる」といったかたちで機能すること、つまり、乳児が対象あるいは世界に能動的に働きかけていくことが想定されているからである。乳児(Säugling)が乳を「のみこむ(saugen)」ことは、先に見たように、諸々の印象を「受け取る」という受動的な行為として捉えられているため、この要素のイメージには当てはまらない。

また、フレーベルは「のみこむ」という行為それ自体に対する考察を加えずに、眼(Augen)のイメージへとすぐに移行し、視覚に与えられる諸印象の影響力について述べている。このような視覚優位の発想は、もう一つの要素である「共同感情と自己意識の芽生え」についても見られる。ここでは、子どもの微笑みと母親の応答が、これらの芽生えの始点となる象徴的な行為とされていた。母子が目を合わせお互いの表情に触れることによって、つまり視覚に導かれることによって、両者には温かな精神的交流が生まれるとされるのである。フレーベルの場合には、乳児期の特徴を「口唇期」と名付けたフロイト(Freud, S.)とは異なり、眼を通じた外界との関わりに重点が置かれているといえる。

最後に、哺乳に直接的に言及しているわけではないのだが、私たちは、以下のような部分から哺乳の情景をイメージすることができる。

もし両親や周囲の人々が、心の中で、次の点に、すなわち子どもは泣きじゃくって落ち着かないでいるが、彼が今欲しがってよいものは、十分に彼に与えられているし、また、子どもの状態からみていま不都合なものや、今後不都合となりうるものは、全部子どもから遠ざけられているという点に、揺るがない確信を持つならば、落ち着かず、泣いている、いや叫んでさえいる子どもでも、黙ってそのままにしておき、我にかえる時間を静かに彼に与えるようにするのがよい (ME 22=37-38)。

フレーベルは、乳児が小さな不快や苦痛には耐え

ることができるように、最初の段階からしつけるべきだと述べている。乳児の場合には、特に哺乳を求めて泣くことが多いが、その際にも、周囲の大人がその子どもの欲求に応えることが本当に必要なのかどうかを判断し、子どもが満たされている時には我慢をさせるべきであるとしている。この部分からは、乳児でも自らの欲求を制御するという正しい振る舞いへと導かれなければならないというフレーベルの発想が垣間見える。そして、食に対する節制的な振る舞いの必要性という発想は、次章で扱う幼児期にも顕著に見られる。

2 幼児期

2-1 幼児期の教育

フレーベルは、幼児期の子ども（Kind）を「自己を外部に知らせる（kund tun）、ないし告知らせる（verkündigen）」（ME 34=66）段階、つまり「内的なものを外に表すことを主とする」（ME 58=125）段階だと位置づける。フレーベルが幼児期の教育に言及した部分はきわめて多く見られるので、ここでは、幼児期の教育を主に特徴づけるものとして、「ことば」、「遊び」及び「庭造り」の三つを簡単に取り上げることにする。

この時期の子どもにとって、ことばを話す人、ことばそのもの、ことばによって指し示される対象は互いにいまだ未分化の状態にある。このような混沌とした世界から、まずは母親ないし父親が発することばを聴き取ることによって、次に子ども自身がことばを発することによって、ことばによって示された対象がゆるやかに輪郭を帯びて子ども自身に立ち現れるようになる。「ことばが用いられるようになると、人間の内的なものの表出や表現が始まり、分節化、すなわち手段と目的にしたがって結びつけられる多様化が人間の内的なものの中で始まる」（ME 34=67）。

つまり、ことばの使用は乳児期と幼児期を画する出来事であり、子どもはことばを通して、徐々にではあるが、ある対象と他の対象を区別したり、ある行為と他の行為を手段－目的の連関に位置づけたりすることができるようになる。内的なものを外的なものとして表現しようとする子どもの試みを促すためには、まず、大人のことばによる働きかけが必要

である。子どもが事物を正しく直観し、またそれを正しく表示することができるように働きかけることが、特に母親には求められる。

幼児にとって「最も純粹で最も精神的な所産」（ME 36=71）となるのは「遊び」である。遊びとは、「内的なものの自由な表現であり、内的なもののものの必要性と欲求から生まれる内的なものの表現」（ME 36=71）であり、「未来のあらゆる生活の子葉」（ME 36=72）となるものである。ここで引用した『人間の教育』（1826年）においては、恩物（Gabe）と呼ばれる遊具を中心にした遊戯理論はまだ展開されていない。その後、1830年代以降にフレーベルは恩物による遊戯理論を深化させていくが、そこでは、遊びは内的なものを外的なものにするだけでなく、「外的なものの活気にあふれた受容」（TS I 21）という意味も有する双方向的な営みだと捉えられるようになる。しかしながら、『人間の教育』の段階では、遊びの意義に対する理解も、内的なものの外的表現という一方向的なものにとどまっている。

幼児期の遊びは少年期以降の「労働」に対応しており、発達にしたがって遊びは労働へと発展する。人間は、労働を通じてのみ、万物を創造した神の似姿にふさわしい在り方をすることができるのであり、早い時期からの適切な労働の経験は、その後の人生における信仰の基礎を形づくることにもつながる。つまり、「労働と信仰とは、神が、永遠なるものが、永遠から創造した同時的なもの」（ME 30=56）として捉えられる。

フレーベルによれば、人間は遊びあるいは労働を通じて「神から与えられた本質を、場所や時や地位や職業が要求するような仕方で、行為や仕事、形や材料において外部に表現することを学ばなくてはならない」（ME 28-29=52）。幼児は、遊びを通して何かを形づくる。労働は大人にとっては骨が折れるものになりがちであるが、幼児がこのような造形的な活動に携わることは、なんら難しいことではない。というのも、子どもには元来、活動衝動（Tätigkeitstrieb）が備わっており、その内なる衝動を大人の保護のもとでそのまま発展させればよいからである。

子どもの活動衝動は、幼児期から少年期に移行す

るにつれて形成衝動 (Bildungstrieb) や造形衝動 (Gestaltungstrieb) へと変化する。フレーベルは『人間の教育』では、少年期に関する記述の部分で、以下のように述べている。「自分自身の庭を造ること、特になんらかの収穫をあげるために庭造りに携わることが、この年頃では重要な、まったく特別に重要なことである」(ME 66=145)。ここでは庭(菜園及び花園)でなんらかの収穫を得ることが重視されているのだが、それは例えば菜園で得られた野菜を味わうためではない。庭造りを通して自分の行為が何らかの成果に結びつくという感覚を子どもに養うことが大切であって、得られた収穫物そのものはむしろ「余分のもの」(ME 28=51)だとフレーベルは考えている。彼はその後も庭造りの活動への関心を深め、最晩年の論文「幼稚園における子どもたちの庭」(1850年)では、幼稚園 (Kindergarten) を「子どもたちの庭において (im Garten der Kinder)」(PK 271=544) と言い換えて、より早い時期である幼児期から子どもが庭造りに従事することの重要性を説いている。

以上から分かるように、フレーベルは、幼児期に不可欠な要素として「ことば」、「遊び」及び「庭造り」を取り上げている。これらの要素はどれも「内的なものを外に表すこと」に資する、幼児期の本質的な活動として捉えられている。

2-2 幼児期の発達における食体験の位置づけ

2-2-1 『人間の教育』より

フレーベルによれば、幼児がどのような食品を口にするのかということが、この時期の子どもにとって「まったく特別に重要」(ME 37=73) である。そのため、大人が子ども向けの食事を選択し提供する際には、次の点に留意すべきである。

- ①食事は質素であるべきで、人工的なものや粹を凝らしたものはいけない。
- ②きつい香辛料で味付けられた刺激的なものや、脂っこいものはいけない。
- ③食事の量は適度であるべきである。

大人が子どもにどのような食事を与えるかによって、その子どもの志向や欲望の方向性は定められる。また、子どもの身体だけでなく、その感覚や感情にも大きな影響が及ぼされる。そして、その影響

は将来にわたって継続し、その子どもが「幸福で、丈夫で、そして真に創造的である」(ME 37=74) かどうかを左右することになる。さらに、「子どもは、食品を通して、怠惰にも活発にも (lebensfaul, lebensstätig)、弱々しくも元気にも (lebensmatt, lebensfrisch)、緩慢にも敏捷にも (lebensträge, lebensfink)、力強くも (lebenskräftig) なりうる」(ME 37=73)。つまり、フレーベルは、食事の内容は子どもの性向を規定すると述べている。

ここで、上の文中で使用されている形容詞に着目したい。これらの形容詞はすべて生命 (Leben) を含んで構成されている。『人間の教育』の中で「生命 (Leben)」は中心的な概念の一つである。この著作の冒頭は、以下の有名な一節から始められる。「すべてのもののなかに、永遠の法則が宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外的なもの、すなわち自然のなかに、内的なもの、すなわち精神のなかに、自然と精神を統一するもの、すなわち生命のなかに、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現れてきたし、またげんに現れている」(ME 7=11)。つまり、生命とは「外的なもの」としての自然と「内的なもの」としての精神を統べるものであり、子どもは、その生命において、外的なもの(身体や食品)から影響を受けながら、内的なものである精神を形づくっていくのである⁷⁾。

幼児に十分に配慮された食生活を送らせることは、その幼児のみならず、「家庭や家族の幸福も、いや市民の福祉さえも」(ME 38=75) 向上させる。「人類の福祉や幸福や救済を促進し、確立することは、私たちが思っているよりも容易なこと、いやはるかに容易なこと」(ME 38=76) だと、フレーベルは述べる。私たちが、食生活の在り方を単に子どもの身体の世話に関わることだと軽視しなければよいのである。

食事はつねに栄養の手段でありさえすればよい。それ以上でも、それ以下でもいけない。まして食事が目的自体となるようなことがあってはならない。それは、ただ単に身体や精神の活動を助成するための目標でありさえすればよい。ましてや、食事の諸々の属性、例えばその味とか良質などが、決して目的自体になってはならない。それらは、どこま

でも有効な、純粋な、健全な栄養のための手段、目的によって条件づけられる手段であればよい (ME 39=77)。

フレーベルは、食事のおいしさや洗練の度合いといった要素に注意を払うべきではないと述べている。食事のために贅を尽くしたり、おいしい食事を目的として働いたりするような在り方を批判し、食事をあくまでも心身の健康のための「栄養の手段」として捉え、質素で節制のある食生活をすべきだと考えている。

ここまで『人間の教育』での記述をたどってきたが、幼児期の食生活に言及する部分では、フレーベルの筆致はきわめて高揚した状態にある。また、乳幼児期の食生活を質素で節度のあるものにしておけば、私たちは、個人としても、家庭生活や社会生活においても、穏やかで満たされた生活が送れるというような、いくぶん誇張ぎみに映るかもしれない表現が使われている⁸⁾。

しかし、そのような表現を使用してしまうほど、フレーベルにとっては、乳幼児期の食生活を整え、質素でほどよい食事を習慣化し、その後の人生における基盤をつくることは重要だったのである。なぜなら、食事は人間の「品位」に関わることであり、また、人間が自らの「義務」を遂行するための基礎をなすものとみなされうるからである (ME 38=75)。つまり、食事は身体的な健康のカテゴリーのみに属するものではなく、私たちの人間としての在り方、つまり倫理に関わるようなものなのである。

以上、『人間の教育』における幼児期の記述を概観した。2-1で確認したように、フレーベルは、幼児期を主に内的なものを外界に表現する時期として捉えており、「ことば」や「遊び」といった活動の分析に重点を置いている。一方で、食事は「象徴的に外的なものを内的なものにする」(Seichter 2012: 76) こと、つまり食物あるいは「食べる」という行為にまつわる諸印象を外界から享受することとして捉えられる。幼児期における外的なものの内化という作用を、私たちはどのように位置づけるべきなのだろうか。

ここで確認しておきたいのは、内的なものとの相互作用が幼児期においても行われている、ということである。

フレーベルは、「内的なものを外的なものにすること、外的なものを内的なものにすること、およびこの両者の統一を見いだすこと、これが人間の使命が表明される普遍的な外的形式である」(ME 32=61) と述べている。つまり、どの発達段階においても、「内界と外界に関する両方向の作用は、乳児期から生の連関そのものとして行われていると見なければならない」(土戸 1986: 103) のである。

『人間の教育』における幼児期の記述は、確かに、内的なものを外的にする活動を中心にしている。しかし、食事に代表されるような活動における感覚を通じた諸印象の享受は、それを支える基盤としてしっかりと機能している。そして、そのような活動は、私たちの生涯にわたる倫理的な在り方を左右するものとみなされているのである。

2-2-2 『母の歌と愛撫の歌』より

1844年頃に執筆された『母の歌と愛撫の歌』には、「味の歌」という小さな作品が収められている(児玉 2009: 60-64)⁹⁾。この本は58編の作品を収録しているのだが、それぞれの作品は、大人向けの題辞、子ども向けの歌詞、欄外装飾画及びその説明から構成されている。そして全体としては、とりわけ母親に向けて書かれた育児書の性質をもつものである。「味の歌」の題辞には、以下のような文章がある。「子どもの感覚をとにかく早く覚まさないではなりません。外的なものを通して内的なものを開くように。子どもはここで早いうちからつながりを予感するでしょう (MK 21)」。

フレーベルはここで『人間の教育』と同様、子どもの感覚への働きかけの重要性に言及している。「お菓子をぴしゃり」という別の作品での彼の説明によると、神の愛により自然が内的に調和して働くことで、私たちには食べ物もたらされる。「子ども—母親—自然—神」というつながりを、子どもは食べ物を味わうことを通じて予感するのである(児玉 2009: 98-102)。

次に、子ども向けの歌詞を見てみよう。フレーベルは母親のような語り口で幼子にスモモを食べよう促す。そして、「ね、どんな味。そうそう、よしよし、甘いね、お舌が気持ちよい」と語りかける。次

に、スモモに比べると「すっぱい」リンゴを勧め、甘いスモモの方が子どもは好みだろうと述べる。そして、「苦い」アーモンドには口を少しすぼめるかもしれないが、なにしろ健康的だし、これも好みになるだろうと言う。それに対して、熟んでいないものの「渋み」はよくないので避けるべきだと述べる。

フレーベルは、様々な感覚のうちでも特に「甘い」、「酸っぱい」、「苦い」、「渋い」といった味覚（Geschmack）の開発を幼児に行うことで、洗練されたよい趣味（Geschmack）を身につけさせることができると考えていた。味覚は、「卑しさ」、「繊細さ」、「低級さ」、「高貴さ」といった価値を含む「倫理的意味へと転化する」（MK 139）のだが、フレーベルは、味覚と趣味の良し悪しが関連づけられる理由を以下のように示す。

味覚／趣味によって、事物の内部、いわば、その本質・魂・精神、事物を活気づけるものや事物を開示するものが示され、また啓示される。すなわち、感覚によって事物の本質とその内部が、私たちの内部へ明らかに知らされるということこそ、実に感覚の仕事であり、高い意義である（MK 139）。

ある事物が有害なものか、それ自体として害はなくても過剰に摂取すると有害になるようなものか、無害なものかあるいは有益なものかなどは、私たちの感覚を通して明らかになる。そのため、感覚を洗練させて、その事物の本質を見抜く力が必要になる。その事物を遠ざけるべきか、あるいはその事物からの作用を受け取るべきか、といった判断は、その事物の本質をその諸性質に即して探究し認識することで成り立つ。そして、「こうした探究と認識は、ただ感覚の注意・結合・比較によってのみ可能」（MK 140）なのである。

例えば、「すっぱさ」や「苦さ」といった性質をもつ食物は、甘い食物とは違ってすぐに子どもに好まれることは少ない。しかしながら、子どもは、母親などから勧められることで、酸味や苦みのある食物についてもその本質を看取り、自分にとって有益な場合にはそれを取り入れるようになる。その際には、味覚・嗅覚・視覚等を働かせて、食物の味・匂い・外観などに注意を向け、異なる感覚器官から得

られる情報を結びつけたり、好ましい「苦さ」と有害な「渋さ」を区別したりする必要がある。このように諸々の感覚を鋭敏にすることによって、子どもは摂取すべきものとそうでないものを判断し、食事の場面でも後に繊細で高貴な趣味を発揮することができるようになる。

フレーベルは、この歌の説明の最後を以下のようなことばで締めくくる。「母よ、であるから、あなたの子どもの味覚をはぐくむがよい」（MK 140）。味覚を通して事物の本質などが私たちに告知知らされる。私たちがそのような本質に即して価値あるものを見抜き、それを好むことによって、私たちには品のよい趣味が形成される。以上のような形で味覚の意義を発見し、幼い時期からの味覚教育の重要性を提唱したところに、私たちはフレーベルの創意を見ることができる。

終わりに

フレーベルは、乳幼児期の食事を「諸印象の享受」として捉えている。乳幼児期を通じて、食事に代表されるような活動における感覚を通じた諸印象の享受は、その時期の発達課題の中心として位置づけられているわけではないが、その時期における発達を支える基盤としてしっかりと機能している。

また、そのような活動は、私たちの生涯にわたる倫理的な在り方を規定するものとみなされている。子どもには、まず、質素でほどよい食生活を習慣づけ、節度ある振る舞いを身につけさせなければならない（2-2-1）。また同時に、様々な味わいの体験を通じて、子どもが味覚などの感覚を鋭敏に働かせ、品位ある趣味を形成し、倫理面での発達にも影響を与えられるよう働きかけなければならない（2-2-2）。

現在の生活体験学習研究においては、乳幼児期より早い胎児期からの連続した食体験の重要性が指摘されている。その際、「濃い味付けに慣れてしまうという刺激の強い食習慣への危険性」（上野ら、2013：13）が指摘されることもある。本論で明らかにした食体験に関するフレーベルの記述は、なぜ刺激の強い食習慣を避けるべきなのかという、現代の食生活上の課題から生じる問いに対しても、説明のための手がかりを与えるであろう。

註

- 1) 「食体験」という概念は、消費段階における食事の活動にとどまらず、栽培・調理・加工・運搬などの段階における幅広い食の体験活動を意味する。「食体験」は食事経験も含むため、本稿では一括して「食体験」という用語を使用している（農林水産省 2014）。
- 2) フレーベルは、大人から見た場合、乳児期を保育（Pflege）、幼児期を教育（Erziehung）、少年期を教授（Unterricht）の段階であるとしている（ME 58=125）。
- 3) この他に、母親が乳児に語りかけ、それに対して、乳児が喃語で何かを伝えようとする行為も取り上げられている（IM 387=340）。
- 4) フレーベルの叙述形式には、語句同士の響きの類似性をもとにして、それらの語句に意味上のつながりを見いだし、そのつながりから自らの思想内容を豊かにしようとする側面がある。ボルノウは、このような叙述には「多くの難点」があるが、同時に、「簡潔な特徴ある形式で、フレーベルの直観をきわめて明瞭に要約している」ため欠かせないものと評価している（Bollnow 1977：147=1973：128-129）。
- 5) 共同感情の概念は、エリクソン（Erikson, E.H.）が乳児期の発達課題として設定した「基本的信頼」の概念と類似している。エリクソンも、乳児期における母子間の「基本的信頼」が、後の信心深さのための土壌となると考えていた（畠山 2006：80-81）。また、発達心理学で取り上げられる「母子相互作用」によるアタッチメントの形成とも重ねて考えることができる（豊泉 2014：158）。
- 6) ここでいう「自己意識」は、自分自身に対する意識という意味ではなく、自己に生ずる感情や欲求などを含むあらゆる志向的体験を指す。
- 7) 身体と精神が「外的なもの」と「内的なもの」と換言されている部分があることから、身体は自然と同様に「外的なもの」として位置づけられる（ME 34=65）。ただし、フレーベルは、身体と精神を相互に独立したものとして二元論的に捉えているのではない。フレーベルにとって、身体を含めた自然は、精神に對置されるものではなく、その内に精神を含むものであり、「自然はそれに内在する精神的なものと一緒になってのみ、外界として、つまり精神の『表現』として現れる」（Bollnow 1977：109=1973：53）といえる。
- 8) 例えば、「若き日の印象の万能」（ME 39=77）という表現が使われている。
- 9) 児玉衣子によれば、この本には出版年が記載されていないが、他の資料から1844年ごろの出版と類推されている（児玉 2009：4）。児玉の書籍には、茅野蕭々訳『母の歌と愛撫の歌』（1934年）が再録されており、本稿はそれを参照している。また、『母の歌と愛撫の歌』は「母の歌と愛撫の歌」7編、「遊戯の歌」50編、「終の歌」1編で構成されており、「味の歌」は「遊戯の歌」の5番目のものである。

参考文献

（以下、邦訳のある文献についても、訳文には適宜、変更を加えている。）

* フレーベルの著作の略号は、以下の通りとする。

- ME: Friedrich Fröbel Ausgewählte Schriften, Bd.2, Die Menschenerziehung, Hrsg. von E. Hoffmann, Stuttgart, 4 Aufl., 1982. = 『人間の教育（上）』荒井武訳、岩波書店、1964年。
- TS I : Fröbels Theorie des Spiels I : Ball als erstes Spielzeug des Kindes (Kleine pädagogische Texte 4), Hrsg. von E. Blochmann, Weinheim, 4 Aufl., 1965.
- IM: Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt. 1. (Bd.2), Ideen Friedrich Fröbels über die Menschenerziehung: und Aufsätze verschiedenen Inhalts, Hrsg. von W. Lange, Osnabrück, 1966. (以下、G.P.S. と略記)。= 『フレーベル全集第3巻 教育論文集』小原國芳・荳司昌子監修、玉川大学出版部、1977年（以下、『全集』と略記）。
- PK: G.P.S., Abt. 2., Die Pädagogik des Kindergartens: Gedanken Friedrich Fröbel's über das Spiel und die Spielgegenstände des Kindes = 『全集第4巻 幼稚園教育学』。
- MK: Die Mutter- und Koselieder: Dichtung und Bilder Zur Edlen Pflege Des Kindheit Lebens: Ein Familienbuch (Scholar Select published by Wentworth Press), Wien und Leipzig, 1883.
- Bollnow, O.F. 1977 Die Pädagogik der deutschen Romantik : von Arndt bis Fröbel, Stuttgart, 3 Aufl. = 1973 『フレーベルの教育学』岡本英明訳、理想社。
- Seichter, S. 2012 Erziehung und Ernährung. Ein anderer Blick auf Kindheit, Weinheim und Basel.
- Seichter, S. 2015 Essen – Bildung – Konsum : Pädagogisch-anthropologische Perspektiven, Berlin.
- 上野景三・永田誠・大村綾 2013 「生活体験学習研究の理論的到達点を探る」、『生活体験学習研究』第13号、1-20頁。
- 児玉衣子 2009 『フレーベル近代乳幼児教育・保育学の研究 — フリードリッヒ・フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の教育方法的検討から』、現代図書。
- 小松佳代子編 2012 『周辺教科の逆襲』、叢文社。
- 白水浩信 2011 「教育・福祉・統治性 — 能力言説から養生へ —」、『教育学研究』第78巻第2号、162-173頁。
- 白水浩信 2016 「ラテン語文法書における educare の語釈と用例 — ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケス『動詞論』を中心に —」、『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第126号、139-154頁。
- 土戸敏彦 1986 「フレーベルのロマン主義 — 幼児教育におけるその有効性について —」、『真宗総合研究所紀要』第3号、95-114頁。
- 豊泉清浩 2014 『フレーベル教育学研究』、川島書店。
- 農林水産省 2014 『基礎から始める 教育ファーム運営の手引き』、<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/taikenn/tebiki.html> (2020年1月3日確認)。
- 畠山祥正 2006 項目「共同感情」日本ペスタロッター・フレーベル学会編『増補改訂版 ペスタロッター・フレーベル事典』、玉川大学出版部。